

## リーディングDXスクール事業 【実践事例】

久喜市立三箇小学校

## 【取組内容①】クラウドの活用による特別支援学級における外国語活動の充実～ MOMINOKI ENGLISH2023 ～

## ★これまでの本校特別支援学級の英語（もみのきえいご）

- ・各季節ごとのトピック（七夕・クリスマス・節分等）
  - ・児童が興味のあるトピック（数・野菜・果物・動物等）
  - ・交流で通常学級の外国語活動に参加した後、そのフォロー
- ⇒課題だったのは・・・
- ・どこに基準をおいてレベル設定をしたらよいか難しい（ある児童にとっては難しく、ある児童にとっては簡単すぎるものに・・・）
  - ・個別のフォローがなかなか難しい（ある児童の外国語を指導しつつ、他の児童の他教科の学習を見なければならぬ状況も・・・）
  - ・（交流の授業を）欠席してしまうと、その時間の内容が抜けてしまう

## ★単元設定の背景

本校で一緒に過ごすのがもうすぐ2年になるALT  
⇒授業では関わりがあるが、自分たちのことをあまり知ってもらえてないのでは？  
⇒もっと自分たちのことを知ってもらおう！

・・・というところから、今年度のもみのき英語は・・・

単元名：「**Let me introduce myself**」

概要：下学年（2～4年）と高学年（5・6年）グループに分かれる。毎時間、それぞれのグループの段階にあった自己紹介の表現に色々なアクティビティを通して慣れ親しみ、それを使って自分の紹介を行う。

## ★方策① Googleスライドを使った学習の進行

本学級では、自立活動でもスライドを使用して学習指導を行っているので、安心して学習に取り組めた。スライドを見ればその時間の学習活動がすぐに分かるので、余計な言葉を削り、簡潔に示すことができた。視覚的優位の児童に合っていると思う。また、単元の初めに型を決めることで、授業準備の時間短縮になった。

## ★方策② Googleスライドや検索機能を活用した Teacher's talk

毎時間メインのテーマに関連した内容で、児童と対話する際、ただ会話するだけではなく、画像を見せたり、対話で話題に上がったものをその場で検索したりしてみた。苦手な児童でも今、どんなことを話しているのかを理解することができた。

## ★方策③ スライドやジャムボードを活用した Activity

これまでアナログでフラッシュカードを使い行っていた単語の発音練習に、スライドでデジタル化したものをプラスした。一斉での指導後は、スライドを配布することで、自分のペースで発音の練習に使っていた。また、これまでアナログで行っていた定番のゲーム（ミッシング・ポインティング・クイズゲーム）を、ジャムボードやスライドを使って実践を行った。

## ★方策④ ドキュメントを活用した Looking back

振り返りでは、ただ紙で書かせるのではなく、項目ごとに児童に発表させ、それを教師がドキュメントに打ち込んだものを電子黒板に映射した。児童名とともに書くことで、児童の発言意欲向上にもつながるとともに、苦手な児童は打ち込まれた内容を見て書いていた。また、毎時間の振り返りを蓄積していくことで、児童の変容をより捉えやすくなった。

## ★方策⑤ モジュールでの自己紹介スライドの作成

毎時間学習する表現を使った自己紹介をするためのスライド（ジャムボード）を、スプレッドシートに一元化し、白紙共有した。作成していき詰まった児童は友達のスライドを参照して、よいところを真似していた。また、簡単に画像を検索して挿入することができるので、オリジナルのスライドを夢中になって作成していた。

## ★方策⑥ スライドと検索機能を活用した各自の自己紹介練習

学んだ表現を使って、授業では自己紹介文を考える（高学年グループは書く）。その各自作成した文章を教師が読んでいる様子を録画し、これもスプレッドシートに一元化し、共有した。それをお手本とし、各自練習を行うことができるので、児童からの質問が減った。自分の自己紹介の動画を各自できるようになるまで繰り返し見て練習できた。また口もとをアップにして撮影することで、より正しい発音の仕方を学ぶことができた。

## ★実践してみても

- ①児童がとても生き生きと学習に取り組んでいた。外国語活動が苦手だと感じて児童も、意欲的に学習に取り組むようになった。
- ②初めに簡単な指示を出すだけで、自分たちだけで学習を進められるようになった。（手本の音声聞いて、各自、納得いくまで練習ができる）
- ③モジュールでの指導も並行して行っていたので、じっくり英語の時間をとることができ、児童の学習事項の定着の度合いもよかった。
- ④児童それぞれのレベルに合った指導ができ、物足りないまたは難しすぎると感じる児童がいなかった。
- ⑤友達のスライドやジャムボードを見て、困っている児童が学習のやり方を理解したり、よいところを真似したりしていた。
- ⑥教員側も、児童の学習の進捗状況を把握し、児童への支援を個別に多く行うことができた。授業の準備時間も短縮された。

## ★次年度の課題

- ①Googleのアプリを活用したより楽しいアクティビティの実践
- ②個々の段階に合った帯活動の実践
- ③今回の実践を活用した、各学年の交流学級での学習のフォロー
- ④振り返りの方法の選択（各自、紙か端末かを選ばせる）
- ⑤来年度の在籍児童から考える、ICTをフル活用し、個々の児童の実態に合った単元計画の創出